

## Book Review 15-24 時代小説 #室町無頼

『#室町無頼』（垣根涼介著）を読んでみた。著者は『午前三時のルースター』でサントリーミステリー大賞を受賞。『ワイルド・ソウル』で、大藪晴彦賞、吉川英治文学新人賞、日本推理作家協会賞を受賞。『極楽征夷大將軍』で直木賞受賞。

2025年1月17日から本書と同名タイトル『室町無頼』（入江悠監督）、大泉洋、堤真一主演で映画上映されることから、松前図書館で目立つように展示されていたので読んでみることにした。

応仁の乱の十数年前（1461年）に起こった土一揆を扱っている。登場人物（骨皮道賢と蓮田兵衛）は史実に則っているようだ。大飢饉と疫病が国内に蔓延し、加茂川べりには8万を超える死体が積まれ、一方、時の足利幕府は京の都で庶民を顧みず享樂の日々を過ごしている。

室町時代は下剋上（伝統的権威が弱まり、兵力と財力を集めた者が力を持つ弱肉強食）の時代である。一揆の時代でもあった。足利義満が將軍だった時期に「北山文化」、足利義政が將軍だった時期に「東山文化」が栄えた。農業では二毛作が普及し、桑や茶などの栽培が盛んになった。陶器や絹織物、鍛冶、鋳物などの技術が発達し、各地で特産物が生産された。定期市が各地で開かれ、経済が活性化した。

物語に戻ると、骨皮道賢は権力側に食い込んで市中警護役を任されている。一方、蓮田兵衛は、ひそかに倒幕と世直しのために飢民を糾合し土一揆を企てようとしている。その計画の一環として、傭兵から生き残った若者を兵法者に仕立てようとし、近江の古老に預ける。

物語の山場は二つ。前半は若者が古老に師事して、過酷な六尺棒の修行に明け暮れる場面（修行を終えた時には超人的な棒術を習得）。後半は蓮田兵衛率いる土一揆対骨皮道賢を含めた権力側との闘争場面である（個性あふれるアウトローが、抜刀術や槍、金棒等で活躍）。骨皮道賢は、最後は守護大名らに捕らえられて、生首を三条河原に晒された。その最期を「昨日まで稻荷廻し道賢を今日骨皮と成すぞかはゆき」と歌で皮肉られたという。

六尺棒の修行場面と土一揆の場面は映像化されると見ごたえがあるかもしれない。